

「自分ごと」としての英語学習

実践から理論、そしてカリキュラム開発へ

今井 純子

1. シンポジウム「考えを深める英語教育実践」概要

英語教育研究では、試験や資格のための学習は短期的なモチベーション向上には作用するが、深い学びに学習者を導く、内面からわき上がるモチベーションには繋がらないと言われている。言語スキルだけでなく学習内容に重点を置く内容言語統合型学習（CLIL）の文脈では、考えを深め、学習者の興味やモチベーションを喚起することができる内容 = content として「何」を教え、どのように評価すべきなのだろうか。共通の課題への理解を深めるため、本シンポジウムでは、中学・高校と大学から4つの事例を紹介した。当日はまず、白井龍馬（横浜女学院）が中学・高校における汎用能力と言語運用能力を同時に育成する CLIL 実践とパフォーマンス評価について、続いて柳川浩三（法政大学）がグローバル・イシューを内容とした大学での実践を、同様に地球規模課題を内容とした実践についてプログラムの変遷と発展の視点から今井（順天堂大学）が発表した。最後に、文体作品を題材とした CLIL の試行について、鈴木栄（東京女子大学）が文体論の知見を踏まえた実践報告と示唆を行った。事例の比較を通して、考えを深め学びに繋がる content は何か、教える方にはどのようなアプローチがあるか、年齢の異なる学習者では方法や内容は異なるのか、そして、文脈に応じたテキストの選択について意見交換を行った。（本稿これより先、筆者担当発表を中心に報告を行う）

2. 英語カリキュラムの変遷

英語教育の現場では、英語をグローバル語として捉える動きが定着しつつある。グローバル化し続ける社会に生きる学習者を対象とする教育では、自己だけでなく、他者や地域のグローバル化に伴う変化、自他の文化の相違や特色や地域性への気づきを踏まえ、地球規模の課題を他人事ではなく、当事者＝「自分ごと」としてとらえさせることが期待されている。筆者が所属する順天堂大学学部国際教養学部では、1年次では異文化コミュニケーション（開設当初、その後変更あり）を、2年英語ではグローバル・イシュー（開設時より継続）を内容として必修英語の授業コマにて内容言語統合型学習（Content Language Integrated Learning; CLIL）（e.g., Coyle, Hood, & Marsh, 2010）を実施しており、学生は、1・2年次の学びを元に専門領域を選び、3年・4年次にはそれぞれの関心に沿った目的別英語科目を履修している。学部設置当初（2015年～）、本文脈では、CLILのアプローチの授業を、少人数のクラス編成で日本人とネイティブの教員が交互に週4回行い、協働学習、自律学修支援、発信型課題、複言語主義を強調した形で行われていた。その後、定員の倍増に伴い、1年次英語科目がスキルベースのカリキュラムに変わったこともあり、当初からの特徴の維持が年々難しくなりつつある過渡期にあると言える。その一方で、気候変動・貧困等の地球規模の課題を扱う2年次英語科目 English for Global Citizenship (EGC) については、学習内容、クラスサイズ、協働学習の機会について大きな変更はみられず、開設から6年目を迎える現在もカリキュラムの発展が続いている。本シンポジウムでの担当箇所では、後者（EGC）における実践に焦点をあて、今後のカリキュラム開発の方向性を探求した。

3. EGC における CLIL の維持と発展

本学部1期生が2年生になった2016年から2021年現在まで、EGCでは一貫して日本や世界におけるグローバル化に関わる課題を、各テーマ1ヶ月をかけてモジュール学習として進め、学生は、記事の読解を通して内容を理解し、多様なアクティビティーやグループワークを経て、学習成果をエッセイやプレゼンテーションとしてまとめている。2018年からは、モジュール学習を、持続可能性=Sustainability を共通目標として繋がる6つのテーマ（前期：観光・和食・ジェンダー；後期：環境・貧困・平和）に絞り、国連の持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）との紐付けを試みている。教材は、毎年、担当教員が協働し、新聞記事やニュース動画を元にオリジナル教材を作成している。通常は20の少人数クラスに分かれて授業を実施しているが、各学期に数回、複数クラスを集めて合同オリエンテーションやSDGsについての導入講義やアクティビティーを行っている。例えば、SDGsについては、ジグソー法でクラス毎に得た知識を持ち寄り、共有して理解を深め、クラスに戻ってさらにディスカッションを進めるなど、クラスを超えた協働学習を推進している。また、モジュールによっては、持続可能性をテーマとしたディベートを行い、クラス対抗で論点に対する議論を深めたりもする。さらに、モジュール学習に並行して、個々の学生は、Issue Log という自主課題で自らの興味・関心に基づき、英字新聞などを使ってリサーチを行っている。これらの学習をもとに、2年間の学習

の集大成として例年1月にはポスター発表を行い、教員や他学年の学生など、学部内から聴衆を迎え、各自のアクションプランを発表する。2020年度は、オンラインでオープンハウスを開催し、Sustainability & New Normal というテーマで、コロナ禍におけるアクションプランを発表した。協働学習を通じて内容理解を深め、アクションプランを掲げて問題解決に取り組むという学びのプロセスを通して、内容中心の英語学習を進めている。

4. 学生アンケートの紹介

シンポジウム当日は、学生のフィードバックとして、2017年から2018年に行った学期末アンケートの結果の一部を紹介した。これによると、内容としての地球規模課題やメディアを活用したオリジナル教材について、7~8割の学生が好意的に捉えており、モジュールやSDGsに関しても、自己の問題意識と結びつけられている様子が伺われた。また、自身の努力や他者とのつながりの中で、解決方法を見つけていきたいというコメントが目立ち、内容が、「自分ごと」として捉えられていると示唆された。学習意欲についても年々ポジティブな回答が得られており、SDGsを導入した2018年後期が最も高かったことから、学生の関心の高さが伺うことができ、協働学習についても前向きに受け入れられていた。英語力の自己評価については、若干のばらつきはあるものの、アウトプットスキル（スピーキング、プレゼンテーション、ライティング）が向上したと答えた学生が多数見られた。その一方で、リスニングやリーディングについては向上が実感できていない学生が目立ち、特に自主学習の場において適切な読み物を見つけ、読書を楽しむことに困難を訴える学習者が多かったことが、発信型課題を多く取り入れる本カリキュラムにおける自律学習支援の課題と思われる。

5. カリキュラム開発の展望

本報告では、CLILによる英語教育実践の変遷と学生のフィードバックについて振り返りを行った。これらを踏まえ今後どのようなカリキュラム開発を目指しているか、最後に述べて結びとしたい。まず、EGCについては、SDGsの17の目標をフレームワークとして教材開発をさらに進め、カリキュラムの定着を試みたい。同時に、TOEFL演習、地球規模課題をモジュールとした学習内容、SDGsの結びつけを強化する必要がある。これらに焦点を置きつつ、発信型課題、協働学習の場の確保、成果発表の機会も工夫し、授業外での自主的なインプット活動を推奨し自律学習支援を進める。また、本学部には、グローバル・イシューをテーマとした社会学系科目に加え、言語・文化に焦点をあてた異文化コミュニケーション科目、健康・医療にフォーカスしたグローバル・ヘルス科目が展開科目として設定されており、領域とのつながりや協働の場を作っていきたい。

一貫した発展を遂げてきた2年次英語科目に比べ、1年次英語科目においては、異文化コミュニケーションを内容としたCLILが、スキルベースのカリキュラムへととって変わられてきた。そのような流れの中でも、フィリピン・セブ島でのTOEFLのスコアアップを狙った夏季研修や、1年次学年末にはEGCへの導入のための合同クラス、EGCのポスターイベントやエッセイコンテストへの参加等、学部内の行事・研修機会や学年を超えた縦の繋がりを活用した学習は継続されている。2年次英語科目に進級した際、CLILにスムーズに移行できるように、1年次英語科目を修了するまでにどのようなスキルを習得させたいか、TOEFL演習との共存はどうかあるべきか、といった課題が残る。現段階の試行錯誤としては、TOEFLのリーディング問題のお題となることが多いリベラルアーツを1年次英語科目に定着させることはできないかという議論が始まりつつある。

今後の見通しとしては、TOEFL演習の要請と内容学習を組み合わせ、2年生はSDGsを中心としたグローバル課題を、1年生ではリベラルアーツを内容として、カリキュラム開発を進めることになると思われる。具体的には、2年次英語科目（EGC）では、現行の6つのモジュールに、地域性、伝統的価値観、歴史文脈、社会変化の視点も加えながら、地球規模のテーマを「自分ごと」として落とし込むことを狙いとした教材開発を進める。1年次英語科目では、スキルやTOEFL演習と共存した内容学習としてのリベラルアーツの可能性を模索し、新たな内容の設定に取り組みたい。

追記

本学部におけるCLILの理論背景、及びリベラルアーツを軸とした新しい取り組みについては、『順天堂グローバル教養論集』第6巻（2021年3月刊行）における著者の寄稿をご参照ください。

引用文献

Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.